

私にとっての超音波事始め

貴田岡正史

公立昭和病院



[略歴]

キタオカマサフミ

氏名 貴田岡正史

勤務先 公立昭和病院

所属部門および役職 内分泌・代謝内科 部長

[経歴]

昭和50年3月 弘前大学医学部卒業

昭和62年9月 東京大学医学部附属病院分院内科助手

平成1年10月 公立昭和病院内分泌代謝科医長

平成5年4月 東京大学医学部非常勤講師併任

平成10年7月 公立昭和病院病棟部長

平成21年4月 公立昭和病院院長補佐 内分泌・代謝内科部長兼務 現在に至る

[学会・社会における活動等]

日本乳腺甲状腺超音波診断会議顧問

日本超音波医学会理事

日本超音波医学会 用語・診断基準委員長

日本超音波医学会評議員

日本超音波医学会関東甲信越地方会運営委員

日本内分泌学会代議員

日本内分泌学会関東甲信越支部副支部長

日本甲状腺学会評議員

甲状腺病態生理研究会世話人

日本内分泌学会内分泌代謝科(内科)専門医

日本内分泌学会内分泌代謝科(内科)指導医

日本超音波医学会専門医

日本超音波医学会指導医

[専門分野]

内分泌代謝学

[研究領域]

甲状腺・副甲状腺のinterventional ultrasonography

表在臓器の3D表示

微小血流の定量化

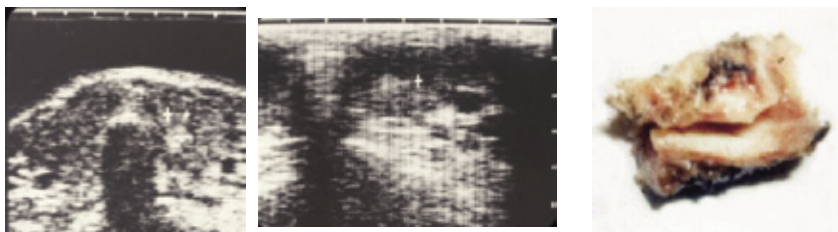
私は元々、内分泌代謝学特に下垂体前葉系を専門としていました。当時からこの分野は基礎研究が中心で臨床例は数が少なく貴重な存在でした。当時の恩師は一に臨床、二に教育、三に研究の三本柱が医師として欠くべからざる要件であることと、その優先すべき順番の重要性を強調されており、医師としての基本的な考え方として教え込まれました。その中で臨床としてもっばら内分泌専門外来を担当しておりましたが、この分野で多数例を占める甲状腺疾患を臨床面での中心とすることは自然の流れでした。

このような経緯で私が臨床甲状腺学を学び始めたのは、超音波医学の諸先輩が基礎研究と臨床への適応に非常な御苦勞を積み重ねた時期から、その成果が各分野でようやく一般臨床に花開きつつある時期への移行に相当しておりました。私が医師になってから3、4年が経過していたしましたので研究室での基礎研究も多忙を極め、新人の教育担当としても必要な戦力であり時間的な余裕がないのも事実でした。だからといって患者さんの診療にあたることの重要性に変わりはありませんし、臨床研究もまた診療レベルの向上に欠かすことはできません。そこで専門外来をやりながらベッドサイドで甲状腺の超音波診断を並行して施行することになりました。

当時は水槽を用いたメカニカルリニアスキャンやメカニカルアークスキャンが表在臓器の超音波診断の

標準でしたが、ベッドサイドの検査として施行することは論外です。そこで画質にはある程度目をつぶり、当時消化器領域を中心に普及しつつあった電子リニア探触子を使用することにしました。周囲には勿論指導してくれる先輩はおりません。超音波装置の基本操作は当時肝胆脾の画像診断を研究していた後輩の町田光司君に教えてもらいましたが、後は試行錯誤の連続でした。高周波の探触子を購入してもらい(と言ってもただか5MHzでしたが)、カップラーを工夫し、ベッドサイドで使えるスタンド形式の水槽を準備したり、手で平行移動できる体積測定用の器具を考案したりと苦労を重ねましたが、今思えば隔世の感があります。

下の図は1981年に超音波医学会第39回学術集会ではじめて発表をした時の症例です。当時は年2回の学術集会が開催されその都度論文集として記録が残されておりました。その論文集からの転載です。症例はびまん性の高度な腫大をきたした甲状腺内に径5mmの結節性病変を認め超音波ガイド下に穿刺を施行したものです。今から思えば画像は見られたものではありませんし、ルーチンワークとしてやられている事柄ですが、当時は甲状腺の分野で触知しない腫瘍の穿刺は画期的なことでした。



また、妊婦における甲状腺体積を月齢ごとに測定し、妊娠経過とともに2から3倍になることを確認でき、超音波医学会の学術集会に発表したことがあります。少々の自負を持って臨みましたが、和賀井敏夫先生から全体的に過小評価であるとのおしかりを受けました。これは水槽の重さによる軟部組織の変形を考慮していなかったためでした。学会場では立ち往生し、帰ってからは随分と落ち込んだ記憶があります。しかし、このご指摘で生体のあるがままを描出する努力の重要性と装置を含めた画像診断の限界を認識しながら診断を進めることの重要性をご教示いただいたと今でも感謝しております。これが私の超音波診断の基本的な考え方と検査のやり方になりました。

以後の甲状腺・副甲状腺の超音波診断に関する私の研究はちょうど超音波機器の機能が飛躍的に進歩する時期にあわせて進めることができ、浅学非才の身でありながら一定の成果をあげることができたと考えています。私の超音波医学における人生は良き先達にめぐまれ、さらに超音波医学の発展過程という幸運な時期を得られたことで成り立っていることを思い、感謝の気持ちをもって仕事をしている今日この頃です。